

ていた源太郎は、ふしぎに思い、その人に、

「なぜ牡丹に手を合わせているのですか。」

とたずねました。すると、その人は、

「わたしは、この牡丹をさかせた人の心をおがんでいるのです。」

という、答えがかえってきました。びつくりした源太郎は、自分が牡丹園の園主であることを名のりますと、その人はうなずいて、

「わたしは、俳句をつくっています。俳句の心と、牡丹を育てる心はにていると思います。わたしはさくまほうし佐久間法師というものです。」

と言いました。

そのころの源太郎は、まつしまずいがんじ松島瑞巖寺のほか、なす那須のうんしやうじ雲照寺というお寺にも行って、禅の修業をつづけておりましたが、ひと佐久間法師の一言が強く心にひびいたのでしょう。この日から俳句の道に入りました。このとき源太郎は四十一才でした。俳句の入門にしては、おそい入門でした。